

第4分科会(岡山県)

主題 豊かな心が育つ保育の実践を考える

～自然や人との関わりを通して～

指導助言者	元中国短期大学教授	森元 眞紀子 先生
司会者	御国幼稚園副園長	松井 早苗
発表者	御国幼稚園主任	服部 啓子
	御国幼稚園教諭	武鑑 裕子 佐々木 知子 森口 りえ
記録者	御国幼稚園教諭	逢坂 依里 渡邊 愛梨

1. 発表の概要

(1) 主題設定理由

人間や自然界のすべての生命を尊ぶ情操教育を考える中で、身近な生き物と直接に触れ合う経験の意義は大きい。なぜなら、身近な生き物に対して、見たり、触れたり、世話をするなどして、関わる中で、それらへの慈しみや思いやりの心が育まれることが期待できると考えられるからである。

近年、核家族化、少子化、自然環境の乏しさ、情報化などの幼児を取り巻く環境の変化や、家庭や地域の教育力の低下、また、直接体験の不足などの中、幼児の心の現状は、生命尊重の意識の希薄化や自尊感情の乏しさ、自制心や規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下など、幼児の心の活力が弱まっている傾向があると指摘されている。

本園においては、自然に恵まれた環境にあるとは言えないが、園外保育に出かけたり、園内における自然環境の構成に努めたりして、「生命尊重」という仏教の教えを根幹とした保育の実践に取り組んでいる。しかし、それだけでは生き物と触れ合う体験は少なく、自然や美しいものに感動する心、生命を大切にする心、他人を思いやる心などの心の成長に関わる育ちを助長するには十分とは言えない。

そこで、豊かな心を育むための環境構成や具体的な教師の援助の在り方を、実践事例をもとに、究明したいと考えた。

(2) 取り組みについて

教職員間で「豊かな心」「豊かな心が育まれた幼児の姿」について、捉え方の共通理解をした。また、幼児が身近な自然や人と関わり、豊かな心が育っていると認められる場面でのつばやきや姿を事例収集し、その事例から、どのような経験が豊かな心の成長につながっていくのかを分析し、幼児が変容した環境構成、教師の援助、友達との関わりについて考察した。そして、継続的な事例研究を通して、幼児の豊かな心が育つ発達の過程を捉えていった。

(3) 実践例

豊かな心が育まれる過程を捉えるために、収集した事例を整理して表にし、その中で、特に幼児が大きく成長した場面を捉えた事例を選び、有効な環境構成や教師の援助をまとめて3歳児、4歳児、5歳児ごとに発表した。表及び事例は以下の通りである。

<表>

- 3歳児 自然や人との関わりを通して心の育ちが捉えられた場面を示す年間表(表1・2)
4歳児 自然や人との関わりを通して心の育ちが捉えられた場面を示す年間表(表3・4)
5歳児 自然や人との関わりを通して心の育ちが捉えられた場面を示す年間表(表5・6)
5歳児 カエルのケロちゃんとの関わりを通して心の育ちが捉えられた場面を示す年間表(表7)
5歳児を中心とした、本園での共同製作「生き物語」の活動の流れ(表8・9)

<事例>

- 3歳児 事例1 - ウサギさん、冷たくて気持ちいいね。一人で寒くないかな？
1 - ウサギさん、恵方巻食べて元気でいてね！
事例2 コウモリさんが喜ぶおうちを作ろう。
事例3 お花の側なら踏まれないし寂しくないよ。
- ダンゴムシの死骸を見つけて -
- 4歳児 事例4 - お父さん(ダンゴムシ)探してきたら、ダンゴムシも寂しくないじゃろ~！
なっ、ダンゴムシおったじゃろ！ - ダンゴムシ3匹でおうちごっこ -
4 - ダンゴムシって、すげ~！ - 葉の裏にまわったダンゴムシを見て -
事例5 こっち上に上げるから、そっちは下げて！
- 大きな段ボール箱の上で、絵の具をつけたドングリがうまく転がるように -
事例6 テントウムシもアリもカマキリも見んどのよ~、どこ行ったんじゃろう？
- 園庭で虫を見かけなくなって -
事例7 - 小さい組さんや、M先生にも見せるんだった！ - 氷を見つけて -
7 - こうしたら、穴あくんで~！！ - 氷で遊ぶ中で -
事例8 先生、見て~！中にツブツブがあるよ！！(クンクン)あっ！匂いした！
- 球根の芽や葉を見つけて -
- 5歳児 事例9 ケロちゃんを幼稚園で飼うためには...。
事例10 ケロちゃんの友達、死んじゃったんよ...。お墓を作ってあげよう！
事例11 (ケロちゃんも、友達も)喜んでくれたら嬉しい！
- 自分達の卒業後、今まで飼っていたケロちゃんをどうするか考えよう -
事例12 (僕達も頑張って)女の子の部屋より大きい(男の子のアリの部屋)作ろう！
- 壁面のアリの巣の中に部屋を作る -
事例13 小さい組さんには、ケロちゃんの絵があるといいよ。お話がわかりやすいよ。
- 「ケロちゃん」を主人公にした紙芝居作り -
事例14 (クモだって)いじわるで食べるんじゃないんよなあ...。
- 虫を食べて生きているクモと虫がどちらも生きられる方法を考えよう -
事例15 この係の仕事、面白くないからやりたくない！でも、困っている人がいるから
しようかな。 - それぞれの遊びの場における役割分担 -

(4) 結果と考察

幼児は身近な自然や人と関わる中で、まず、様々な感情(驚く・きれい・不思議・かわいい・気持ち悪いなど)を抱く。次に、興味・関心もち、関わり、疑問や不思議に思ったことを友達や教師に伝えたり、共感したり、図鑑で調べたりする。更に、そのものへの思いやりの心が芽生え、命の大切さを実感することにより、意欲や態度が育ち、思考力や表現力、感動する心や感謝する心などが培われるような経験の積み重ねによって、豊かな心が芽生えてきていることがわかった。教師は幼児の心が動いて、見て、触れて、やってみたいと思えるような環境構成をすること、教師自身が好奇心をもって自然に関わり、生き物に対してモデル的に接すること、また、幼児理解に努め、幼児が必要な経験ができるように、気付きに共感したり、一緒に考え行動したり、物的な環境を準備したり、話し合いの時間や場を確保したり、アドバイスをするなど、適切な援助や指導を行うことが必要であることを確認した。(ただし、幼児の興味・関心をよく見極め、大人の側からの過度の知識を与えることは、幼児の考えを限定してしまうことがあるので、教師の一方的な知識の伝達にならないように気をつけることが必要である。)また、教師は、今までの活動の流れ、場の状況、友達との人間関係、性格、興味、関心などを踏まえ、背景を読み取るということが必要であり、幼児達は試行錯誤し、失敗を重ねながらも工夫し、成功を経験するという過程の中で成長していくことが確認できた。以上の指導の積み重ねによって、幼児は身近な生き物や植物や美しいものなどに不思議さや感動する心、対象物を自分と置き換えて考え、優しくしたり、寂しくないようにしたり、より快適に生活できる方法を考えたりなど、自分以外のものに対して、思いやる心、ひいては命を大切にすることなど、全てのものを慈しみ、思いやる豊かな心を育てているということを確認した。また、生き物との関わりに、大人から見ると残酷に見える行為でも、幼児達にとっては、特性を捉えるための行為であったり、新しい発見をしていたりすることがあるとわかった。と同時に、幼児はその生き物のことを心配し、生き物自体の力に驚き、心を動かしている。そこで教師自身も、関心をもって、温かく見守る姿勢が大切であるとわかった。

3歳児についてみると

入園当初は身近な小動物や虫への接し方がわからず、恐がって見るだけだった状態だったが、教師と一緒に園庭の花を眺めたり、飼育されているウサギを見たり、餌をやったり、また虫に触れたりする経験を重ね、自分達より小さい存在の生き物に心を寄せ、いろいろな発見を楽しみながら、かわいい、面白い、不思議、そして愛おしいものとして扱えるようになっていった。

内容的には、幼児は教師の動植物への関わり方を見たり、その時の生き物の気持ちを代弁して伝えられたりすることで、相手の気持ちに気付いたり、自分に立場を置き換えたりして、命あるものへの関わり方を学んでいる。また、その生き物に対して、自分が何かをしてあげたことへの喜びや、その生き物の反応を教師や周りの友達と一緒に体験し、共感している。4歳児、5歳児にお世話をしてもらったり、一緒に遊ぶ中で人や生き物、植物への接し方を、直接見たり教えてもらったりすることで、相手の立場を考えながら行動することができるようになってきている。

教師は幼児の側で活動の様子を見守ると同時に、幼児の思いやちょっとした驚き、発見、自然への関わりに共感し、感動することを心がけてきた。また、教師が幼児の心の代弁者となり、心の安定を図ったこと、そして時には、気付いてほしいことや感じてほしいことへの方向を示す声かけをするなど、幼児への働きかけを細やかにし、関わりを密にすることが、心が豊かに育っていく上で有効な指導であったと考えられる。そして、教師は常に幼児達のモデルであり、自然、特に生き物については、命を扱うので正しい知識と理解が必要だと感じた。

幼児の何気ないつづやきの一つ一つにも意味があるものであり、幼児が自分の思いを表現できるような声かけをする必要がある。また、幼児の実態やつづやきに合わせて環境の再構成を行ったり、自然や人と幼児をつなぐなど、仲介の役目をするのが教師であるとわかった。

4歳児についてみると

進級当初、自然や身近な動植物に関心を示すものの、触れる経験の少なさからか、ダンゴムシやテントウムシなどを見つけて捕まえ、集めることを楽しむが、別の活動に興味に移った途端、虫を遊んでいた場所に放置したり、急に手から放したりするなど、自分本位な関わり方が目立っていた。また、友達との関わりでも、自分の思いが先行し、遊びや様々な活動の中で、相手の意見を聞こうとせず、トラブルになることもあった。

教師が遊びや活動の雰囲気盛り上げ、幼児同士の関わりが深まるように、仲間として入り、いろいろな場面において、表情、姿勢、投げかけ、幼児との位置関係、雰囲気などを意識した言動をとったことで、友達の思いに気付き、友達の動きを見て、自分の動きを考える、面白いと感じたものを見せてあげようとするなど、思いやりの気持ちをもって、相手に関わろうとする心が育ってきた。

また、教師が、一人の幼児の気付き、発見、驚きなどを認め、感動を共有し、それを周囲の幼児にも伝え、様々な感情の共有、共感、様々な思いの交流の場を友達と一緒に体験できるようにしてきたことで、充実感や満足感をもち、安心して思いや考えを表現したり、周りのものを自然に受け入れたり、教え合ったりするなど、お互いの姿を刺激とし、そして、最初、幼児と教師の思い・考えが異なる場面においても、幼児の思いを受け止め、温かく興味・関心をもって見守ったことで、対象への興味を深め、「もう一回やろう！」「今度はこうしてみよう！」「～したらどうなるだろう。」など、意欲的に取り組もうとする幼児の心が育ってきた。

年間を通して、教師は図鑑や絵本だけでなく、実際に幼児が自然や身近な動植物を、よく見たり、友達の様子を見て触れてみたり、調べたり、確かめたりできるような環境に興味・関心の高まりに合わせて、整えてきた。その環境の中で、幼児が自然の不思議さや美しさ、かわいさ、変化に触れたことで、感動し、大切にしようとする思いが育ち、自然に對し思いを寄せられる幼児の豊かな心の育ちにつながっていったと考える。

5歳児についてみると

進級当初、自然や身近な生き物を、見たり、触れたり、飼育当番で決められたことはしたりするが、思いを寄せるそのものの特性に応じた関わりをしたり、責任をもって世話をしたりする姿は見られにくかった。また、友達との関わりについては、周りの友達の言動に流される幼児、逆に自己主張して満足している幼児が多く、友達と思いやイメージを伝え合いながら遊ぶことは、難しかった。

しかし、園外保育で見つけた一匹のカエルを、自分達が卒業するまで飼育し、自分達と同じ5歳児の仲間の一人(一匹)とまで思いを込めるようになった過程を通して、生育環境や餌について自分達で調べたり、名前をつけて、自分達のカエルの「ケロちゃん」と親しみの情をもち、友達を作ってあげようとする姿が見られたり、「ケロちゃん」の友達にしようとしたカエルの「死」に直面して命の尊さを実感したりし、飼育を継続していくことで、思いやりや、自分達が卒業をした後の、「ケロちゃん」のことを慈しむまでの心の成長がみられた。そして、カエルへの友達の思いを、大切にしようと思えることができるようになった。また、共同製作の中で、イメージした世界を表現して疑似体験することで、より一層、自然や周囲の人のことを、共に生きるものとして大切に考えられるようになった。

共同製作や、今回は事例には入れていないが、発表会・お店屋さんごっこの商品作りなどの

共同的な遊びの場では、自分の思いやイメージが友達の思いやイメージとつながっていく過程を楽しみ、互いに刺激し合いながら、遊びを発展させていくことができるようになった。また幼児は、協力することの楽しさに気付き、自分とは異なる場合でも認め合う心や譲り合う心が育ち、友達の思いを考えて行動しようとする姿へと成長した。

上記のように幼児達の心が豊かに育ったのは、次のような指導の結果であると考えられる。まず、幼児が考え、選択できる環境を与えたこと、また、幼児一人一人の思いやイメージ、体験をつなぐことができるように、伝え合える場と時間を確保したことが考えられる。そして、共同的な遊びにおいては、一人一人の思いやイメージを捉え、特に自己表現が苦手な幼児や、話し合いの中で少数派になってしまった幼児の思いに寄り添い、タイミングよく全体に伝えたこと、話し合いの場や幼児達が考えたことを記したもののや、作ったり持ってきたりしたものを掲示するスペース・木、草、土、池などの自然の風景を壁面装飾にして、継続して遊べる場などを確保したこと、また、試行錯誤や葛藤する体験ができるように環境を整えて様子を見守ったり、周囲の幼児に間接的に働きかけたりしたことで、満足感や達成感を持ち、自信をもって行動できるようにしたことが有効な指導であると考えられる。

(5) 今後の課題

幼児の興味や関心の深まりに応じた体験を積み重ねていけるような環境や、場の工夫、また環境構成の充実を意図的・計画的に図っていく。

幼児の思いの読み取りについて、他の教師の意見も聞きながら、幼児の変容や育っていく姿を丁寧話し合い、共通理解を深める時間をより一層もつ。

2. 研究討議

<グループ討議>

研究発表を受けて、全体的な感想を述べ合うとともに、「自然と幼児をつなぐ環境構成」「地域の自然や園庭の活用方法」「生き物の死について」「幼児の育つ力を、待つ、教える、教師の役割としてのバランス」について、小グループで意見を交わした。概要は以下の通りである。

緑グループ

感想

- ・各園をとりまく自然環境は様々であり、その中で幼児と自然が関わる工夫はしているが、幼児達の興味・関心をつなげ、高めていくことができていなかった。

生き物の死について

- ・命の大切さを日々幼児に伝えていくことが大切。
- ・園で飼育していた動物が亡くなった時、タヌキやウサギなどの場合、死んだ姿を幼児に見せることはためらってしまうが、言葉で伝えていく必要はあるのではないかと。

教師の役割について

- ・自然や生き物に興味がない幼児に対しては、話し合いの場を設け繰り返し伝えていく。
- ・年齢が低い場合、教師が生き物の世話をする姿を幼児に見せる。
- ・幼児の状況や姿を見て、押したり、引いたり、駆け引きをしながら声かけなどの援助をする。

黄グループ

自然と幼児をつなぐ環境構成

- ・幼児が自ら自然を発見できるように、教師は声かけをする。
- ・教師が自然物を園に持参し、それについて幼児達と話し合ったり、製作に使ったりしている。

地域の自然や園庭の活用方法

- ・園の周りに自然が少ない場合は、近くの公園に行っている。

生き物の死について

- ・あまり死に直面させたことがない。
- ・研究発表を聞いて、死についてどのように幼児と共有していくか考えていく必要があると感じた。

教師の役割について

- ・それぞれの園で考え方に違いはあるが、このような話し合いの場があると、様々な意見が聞けて良い。

赤グループ

感想

- ・幼児のつばやきを拾うことは大切であると感じた。
- ・教師によって動物に対して好き嫌いがあると思うが、クラスによって保育に差が出てはいけな

生き物の死について

- ・命の話をしたり、お墓に手を合わせたりということは大切であるが、広島の場合、土砂災害が近くで起きた幼稚園では、その災害がトラウマとなっている幼児もいて、そのような行為が災害を連想させてしまう場合もあるので、一人一人の幼児のことを考え慎重に扱わなければならない問題でもある。

白グループ

感想

- ・生き物を飼う場合、世話の仕方など幼児達にはすぐに分からないことも多々あるが、それを教師が最初から全て教えるのではなく、幼児と一緒に調べていくことが大切だとわかった。

生き物の死について

- ・アリなど小さな生き物の命の扱い方が少し疎かになっている。
- ・幼児はアリを見つけ、握る力加減がわからず、死なせてしまうこともあるが、その体験を通じて分かることもたくさんある。

橙グループ

自然と幼児をつなぐ環境構成

- ・4月になったらダンゴムシを集め、飼い、赤ちゃんが生まれたこともあった。
- ・鳥取のある幼稚園では、ラッキョウを育て、収穫し、酢漬けをして、幼児自身がバザーで売るという経験をしている。

青グループ

自然と幼児をつなぐ環境

- ・植物や野菜を育てて観察しながら話し合ったり、お弁当に入っていた果物の種を園庭に植えて育てたりしている。
- ・山が近い園では、山に歩いて行って、サルやシカを見に行ったり、お弁当を食べたりしている。

園庭の活用について

- ・園庭では裸足で過ごし、石拾いをしたり、アスファルトの暖かさを感じたりしている。

生き物の死について

- ・満3歳児の場合、生き物が死んだ際は、教師が声をかけながら、一緒に土に埋めたり、手を合わせたりしている。
- ・園に持ってきた虫やカエルは、捕まえた場所に返すように声をかけている。
- ・死を繰り返さないためには、どうすればよいか幼児達と考えている。
- ・生き物を飼育する場合、短期間ではなく長期間飼育する方が、命の大切さを幼児が実感しやすいのではないか。
- ・幼稚園だけではなく、家庭でも命の大切さについて話し合うことが必要である。

水グループ

自然と幼児をつなぐ環境構成

- ・園で動物を飼ったり、公園や山や川に行ったりしている。

教師の役割について

- ・幼児が興味関心をもてるようなきっかけを作る。

桃グループ

自然と幼児をつなぐ環境構成

- ・入園当初、アリにも触れなかった幼児が、年長児に色々なことを教えてもらい触れるようになった。
- ・年に1度移動動物園を呼んでアヒルとか色々な動物に触れあうようにしている。
- ・園にある梅の木から採れる実の感触を楽しんでいる。

生き物の死について

- ・生き物が死んだ場合、状況にもよるが、教師が処理をしてしまうことも多い。
- ・死んだ場合でも、どうして死んでしまったか、どうすればよかったか、など教師と幼児が共に考えていくことが必要である。

3. 指導助言

(1) 発表内容に対する指導助言

自然と幼児達が関わり、自然を知るにあたり、『環境』という言葉が大切となる。また、幼児教育は、環境を通しての教育である。

地域の自然や園庭をどのように活用しているか。

環境には、自然が一番たくさん含まれており、自然体験しやすいのが園庭である。

生き物に関わっている時、その命と死をどのように扱っているか。

生き物を飼ったり、植物を育てたりしていると必ず死に直面するため、どのように向き合ったらよいのか考えなければならない。

(2) 全体を通しての指導助言

幼児達の自然体験がなぜ必要なのか。それは、明治時代の頃から、自然体験の大切さが言われており、科学的な思考力の子を育てるため、また、人間性(思いやり・美しいものに感動する)を養えるためと考えられているからである。この世に生きる全てのものと共に生きるためには、どうあればよいのかという自然観を幼児達は身につけていくが、自然は、絵のように形あるものにはならない。そこで、教師は、幼児達が自然に関わっている時の言葉や言動を丁寧に聞き、指導する時には、幼児の育ってきた環境・幼児の考え方を読み取ることが大切となる。

園庭について

- ・園庭は、幼児達が心を解放し、身体も解放する幼児達にとって安心できる場である。
- ・園庭にどれだけ自然の要素があるか

幼児達がしようとしていること（掘っても良い・ダンゴムシを探しても良いなど）が保障されている。一年を通して自然を感じ取れる木・生き物がある。

季節の巡る循環性・ものが成長することを知る。

- ・教師は、安全を確保できる園庭、自然を体験できる環境の用意をする。そして、その環境の中で、幼児達は、何度も繰り返し活動し、物事を自分のものにする。これが、幼児期の特性である。そのために教師は、幼児達が直接見る・触れることのできる多様性のある環境になっているか、また、幼児達が自由に活動できる機会・時間の保障ができているかどうかを見定めなければならない。
- ・大人が何かを教えるのではなく、幼児自身が自分で体験して、自分の感覚、五感を通して様々なことを知ることができる。
- ・環境は、あるだけではなく質の問題
自然の少ない園は、地域を利用してみることもよいが、継続して日常的に触れ合える環境と比べると、幼児達が得るもの、体験するものに差は出てくる。

命（死）について

現在80%の保育者が、保育の場で命の教育が大切だと答えている。飼育物が死んでしまうと、新しいものを飼えばいいという幼児が出てきているからである。

- ・ものを飼うには、責任と忍耐が必要である。死に直面することは、命・死について考える良い機会であるが、死について全員に同じことを伝えるか、個々の幼児達に合わせて伝えるかは、目の前の幼児達の状況で判断するのが良い。
- ・「なぜ生き物を丁寧に扱わなければならないのか」を幼児達の心に届けなければならない。
- ・幼児達が辛い時に心を癒す、自分を取り戻せる相手が生き物、あるいは植物であると考ええる。
- ・たくさんの自然と出会い、様々な体験をし、楽しむといった文化を幼児達に伝えていくべきである。

幼児達から出てくるのをどこまで待ち、どこで知らせるかについて

- ・幼児達に自ら伸びる力があることを信じるのは、保育者としての基本的な考え方である。
信じるのは良くいえば、見ている、見守っているということであるが、見方を変えると、幼児達がどのような状態なのかを理解せず、放っているといえる。
幼児達の関心がないのに教師が一方向的に教えてしまうと教師主導型となる。



正解はない

教師一人一人が幼児達と真剣に向き合い、今は待つ、今は知識を教えるといったバランスをとり、臨機応変に対応していかなければならない。

教師の役割について

- ・教師自身、自然が好きであると、普通であると見えなかったり、聞こえなかったりするものにも、目が向いたり、聞こえたりしてくるからである。
- ・自然が好きでないという教師は、まず、幼児達と同じ目線に立って、一緒に見てみたり、幼児達が感じたように自分も感じたりする（幼児と視座を共にする）ことで、自然を好きになるようにする。そして、命ある生き物・植物についての知識を身につけておくようにする。
- ・生き物を飼う時に必要なこと

- ・覚悟
- ・幼児達が主体となる飼い方
- ・飼育小屋の場所や形
- ・飼うものが自然な形で生活するための棲みか



「なぜ、園で生き物を飼うのか?」、「何を幼児達に体験してもらいたいのか?」、「どのような心が育ってほしいのか?」から考えてみるようにする。

- ・学校教育の出発点である幼稚園において、道徳性の芽生えを培うという面で豊かな心を育てるために、自然と幼児達を仲介する役割は、教師であると考え。
- ・教師は、自然と幼児達を繋ぐ橋渡しができる。

直接体験ができる場を整えるにあたり、どのような配慮が必要か、また、どこまで幼児達がじっくりと遊び、何度も繰り返し活動することができるかという保障を教師が心掛けていくか見直していくようにする。

自然の中での遊びは、目に見える形にはなりにくい。

- ・自然との関わりの中で、大人には見えないが、幼児の豊かな経験(学び)が育っていることを教師が理解しなければならない。そして、それを教師間だけでなく、保護者に伝えていくことが大切である。
- ・幼稚園教育で何を大事にしているのかが、保護者に理解されにくい時代になっている。

保護者は、幼児達が生き活きと喜んで活動することで、満足度を得る。

園で教師は、幼児達がしていること、また、心の中がどのように育っているのかということとその時々で、きちんと説明しなければならない説明責任がある。

現場の教師の研究とは?

- ・保育実践を通して、幼児達と生活しながら指導したこと、実際に幼児達に声をかけたこと、また、手を添えたこと、環境を用意したことと、それによって幼児達がどのように変容していったのかということ。この2つのことから、保育の指導の方法、あるいは、幼児の発達をどのように捉えていいたらよいのかを発見することが、現場の教師の研究だと考える。

